

キェルケゴールにおける「現代」にまつわる一考察 —ヘッカー、ゾフィーとともに—

山本邦子

はじめに

本小論で副題に挙げた二者を取り上げるのは、第三帝国時代に白バラ抵抗運動に加わったゾフィーがヘッカーから精神的影響を受けており、そのヘッカーにキェルケゴール関連の著作が多いという事実に着目したことによる。ここでは三者を「現代」という軸で括り、三者それぞれにとっての現代をめぐって、第1章ではキェルケゴールとヘッカーとの間の共通点を、第2章では両者間の相違点を、第3章ではゾフィーとキェルケゴールとの関係を考察し、最終的に三者の関係を問いたい。なお、ドイツの元大統領ヴァイツェッカーによる演説についての次の解説を考察の一つの手がかりとしたい。

〔1993年〕2月15日に、ヴァイツェッカー大統領（当時）が、ミュンヘン大学における〈白バラ〉記念の催しに際して短い、しかし格調高い演説を行った。「心にまとう無関心のマントを破り捨てよ。手遅れにならないうちに決断せよ。」と、〈白バラ〉のビラからの引用で始められたその演説は、独裁に対する抵抗運動としての〈白バラ〉を高く評価する。・・・われわれはいつも新たに、心の中に白バラの合図にこたえるエコーを感ずる、と述べてから、彼は次のように説く。・・・多くの人が自分たちにならって立ち上がるだろう、と考えた学生たちの期待は空しかった。そのため、彼らの運命は挫折と見なされ、1848年の3月革命が挫折したのちに政治的な推進力を失った市民層の非政治的態度の継続と考えられた。しかし彼らの抵抗は、悪に対する反論

を通じての対立存在であった。そのどこが、非政治的なのか*1。

第1章 キェルケゴールとヘッカーとの共通点

テオドール・ヘッカー*2は、キェルケゴールによる3作品*3を一つにまとめて訳し、『選ばれし者の概念』(*Der Begriff des Auserwählten*) (1917年刊)と題して刊行した。その「あとがき」の中でヘッカーは、「我々はキェルケゴールとは歴史的に異なる環境に置かれている。彼はヨーロッパの破局をたしかに確実性として予言したが、現実的には可能性として体験したのに対して、その破局は最も不快な現実性として我々に達した」*4と述べ、可能性から現実性へと、大きく異なるとはいえヨーロッパの破局という線上で二人はつながっているという認識を示している。

キェルケゴールの『文学批評』が出版されたのは1846年である。ヘッカーは、同書中、IIIの後半部分「現代」を独立させて『現代の批判』(*Kritik der Gegenwart*)と題して訳し、「あとがき」をつけている。その後キェルケゴールは『自省のために、現代にすすむ』(1851年刊)およびそれと対をなす『汝ら自ら審け!』(死後出版)を著したが、彼がとりたてて「現代」という言葉を用いる場合には鋭い時代分析が含まれており、それと明示されていなくてもコルサー事件(1845年末から46年春にかけて)が影を落としている。

『文学批評』の「現代」におけるキェルケゴールの時代認識は、「現今は本質的に、分別のある、反省的な、無情熱な、軽薄に感激で燃え上りそして如

*1 関楠生『白バラ』、清水書院(1995)183.

*2 テオドール・ヘッカー(1879-1945)はドイツのシュヴァーベン出身で、ムートの「高き地」への投稿や自著執筆のほかキェルケゴールやJ.H.ニューマンの著作を翻訳し、それに自らの「まえがき」や「あとがき」を付して出した。21年にニューマンの影響によりプロテスタントからカトリックに改宗、33年以降ヒトラー国家との葛藤を余儀なくされたが、密かに『日そして夜の記1939年-1945年』の原稿を書き溜めていた。

*3 3作品は *Das Buch über Adler, Darf ein Mensch für die Wahrheit sich totschlagen lassen?*, *Über den Unterschied zwischen einem Apostel und einem Genie* と独訳されている。

*4 Th. Haecker, *Der Begriff des Auserwählten*, Brenner-Verlag (1926) 412.

才なく無関心の内にくつろぐ時代」*5というものである。革命時代が行為的であるのに対して、分別力と反省が邪魔をして、現代には行為と決断が欠けている。なぜなら、反省の理念は嫉妬ともいえ、「個人における主我的なもの〔妬み〕、そして更に彼に対する周囲の妬み」*6という、二重の歯止めがかかり、そのために、「あらゆる騒々しい態度を避ける静かで数学的で抽象的な仕事」*7といわれる平坦化が起こるからである。しかし、「平坦化が実際に出来上るためには、先ず一つの幻影が呼び出されねばならない」*8。この時代にその働きをしたのが新聞である。「新聞の抽象化は時代の情熱の無さ及び反省化と結び合って、公衆という抽象の幻影を生み落とす」*9のであり、新聞という名の犬（文学的卑劣さ）を飼っている公衆は卓越した者に犬をけしかけ悪ふざけをするが、しばらくすると退屈して何事もなかったかのように平坦化するのである*10。ヘッカーは、上記『現代の批判』に付した「あとがき」の中で、この「犬（文学的卑劣さ）」や「犬が捕らえられて打殺されるために獣医学校に送られる」*11といった厳しい表現の背後に、コルサーに対する「恐ろしい憎悪のようなもの」（*ein wie furchtbarer Hass*）を見て取り、ここにキェルケゴールの認識の源泉の一つがあったと解している*12。

さらにヘッカーの言葉*13を聞けば、「1846年にすでに1914年（ヘッカーの『現代の批判』が出た年）の様子がわかっていたとまではいえなくても、キェルケゴールには多くのことが予見されていたにちがいない」と、コル

*5 S. Kierkegaard, *En literair Anmeldelse, Samlede Værker* Bind 14, Gyldendal (1962) 63.

*6 *ibid.*, 75.

*7 *ibid.*, 77.

*8 *ibid.*, 83. なお、「大衆を動員することがその目的だったのであるが、それもまた、『大衆』を作り出さなければ達成することができなかった。それでヒトラーは、民族の『大衆化』をねらった」（ヘルマン・グラウザー『ヒトラーとナチス』関楠生訳、社会思想社（1986）86）参照。大衆化の核心をキェルケゴールはついている。

*9 *ibid.*, 86.

*10 *ebenda* 参照。

*11 *ibid.*, 87.

*12 Th. Haecker, *Kritik der Gegenwart*, Hess-Verlag (1946) 83.

*13 *ebenda*.

サー事件という「個人的体験、苦悩から生まれた経験」に基づく先見性およびキェルケゴールが秘めている人格の力 (Gewalt) ——人間の中のデーモンの口を割らせる力——に注目している。しかし「現代」という言葉が含まれるこの『文学批評』の「現代」でも、『現代にすすむ』でも「政治」は問題とされない。

ヘッカーは次のように続ける^{*14}。「この作品は 1846 年に出た。そして 1848 年は？ なるほどここには「政治」という言葉は出てこないが、「後年現に『時代に抗する立役者』 (Aktor gegen die Zeit) として登場し、宗教的テーマでスカンディナヴィア全域を情熱的緊張に引き込んだ」キェルケゴールに政治についての知識が欠けていたはずはない、と断言している。この「あとがき」の中ではキェルケゴールと同じくヘッカー自身も、「今日世界を統治しているのは誰か。新聞である。23 万部の発行部数を誇るベルリーナー・ターゲブラット紙において。文芸欄は政治に、政治は文芸欄に含まれているから」^{*15}と書き、政治と新聞が手を組んで無責任で無精神的な空論を弄しているという見解を示している。

ヴァイツェッカーの演説でも取り上げられたこの 1848 年はどういう年であろうか。「フランスでの 2 月革命を端緒に、革命と動乱の衝撃波」^{*16}が各国に及び、キェルケゴールも国家秩序の変革を体験し、「1848 年におけるフランス革命理論のデンマークへの遅い侵入とヨーロッパの他の国での激烈な変動」^{*17}を「世界 - 変動」と呼んでいる。他方、ドイツの「3 月革命ではブルジョアジーでなくて、ユンカー自らが指導権を握った。そこではブルジョアジーの勢力があまりにも弱くて、封建的生産関係を変革することができず、そのためにユンカーと妥協したのみならず、近代化の革命の大事業までも」^{*18}ユンカーに委ねられたのである。

^{*14} *ibid.*, 85.

^{*15} *ibid.*, 88.

^{*16} 飯島宗亨編『キェルケゴールの講話・遺稿集』第 5 巻、新地書房 (1989) 323.

^{*17} 『キェルケゴール著作全集』(以下、『著作全集』とする) 第 14 巻、創言社 (1988) 498 頁の註 173 参照。

^{*18} 相沢久『現代国家における宗教と政治』、勁草書房 (1977) 37.

一転して「政治」という言葉は、キェルケゴールの死後に出版された『我が作家-活動に対する視点』の「付録」^{*19}として添えられた『単独者』の序言の冒頭では前面に出る。「近時、あらゆる事が政治である。宗教的なもの見地が、それから天地のように遠く相違しているのは、出発点と目標もまた天地のように遠く相違しているのと同様である、というのは、政治的なものは地上に止まるために地上で始まるが、他方宗教的なものはその初めを上から得てきて、地上的なものを解釈して、それから地上的なものを天に揚げようとするからである」^{*20}といわれる。この「付録」の「第1 献辞『彼の単独者』に対して」には1846年という年号が付されている。すなわち、ヘッカーが指摘しているように、すでに1846年にキェルケゴールには、現代においては政治という地上的なものが支配的で、宗教的なもの、精神的なものが等閑に付されているとする認識があったのである。コルサー事件は早くも1848年の激震を予告する前哨戦であったのであり、キェルケゴールはその激震の胎動を敏感に聞き取っていた。そのためにはヘッカーがキェルケゴールのうちに感じた「恐ろしい憎悪のようなもの」が一役買っていたのかもしれない。したがって、「付録」の「第2『単独者』に対する私の作家-活動の関係について一言」(1847年に書かれた)において、「単独者」が「精神の、精神-覚醒の範疇である、政治にはあらん限り対立したもの」^{*21}として明白に認識されたときをもって、後年「時代に抗する立役者」として彼が真のキリスト教を現行のキリスト教界に導入する際に必須とされた決定的役割がこの概念に付与されたときと見てよいと思われる。

政治とキリスト教の関係に関しては、ヘッカー自身も『選ばれし者の概念』の「あとがき」で「神から純粋な全体的思考を恩寵の賜物として受け取った者はそれを政治的に考える以上に容易に台無しにすることは不可能」^{*22}と述

^{*19} S. Kierkegaard, *Synspunktet for min Forfatter-Virksomhed, Samlede Værker* Bind 18, Gyldendal (1962) 145. なお、この「付録」に関する事情は『著作全集』第14巻493頁の註148に詳しい。

^{*20} *ibid.*, 149.

^{*21} *ibid.*, 165.

^{*22} *Der Begriff des Auserwählten*, 399.

べ、キェルケゴールと見解を一にする。

ヘッカーは、第三帝国におけるプロイセンのナショナリズムと一体化したプロテスタンティズムをドイツ主神教として徹底的に批判する。ドイツ主神教は、ドイツ民族の永遠の存続を約束するものであり、ドイツ民族に役立つものをすべて正当化する^{*23}。「ドイツ人は、ルターの悪事 (Untat) によって、またプロイセン指導下の小ドイツ的解決による帝国理念を引き継ぐことによって、帝国への使命を果たした」^{*24}と彼はその元凶をルターに見ている。キェルケゴールのルター批判も厳しく、一方ではルター本人について、「ルターは殉教者にならなかったことによって、実際測りしれない害を及ぼした」^{*25}とさえ述べるが、他方、『汝ら自ら審け!』では、「現行のキリスト教界、少なくとも私はそれについて語っているのだが、それはルターの立場に立っている。しかし、次のことはまた別問題である、すなわち、ルターが現行のキリスト教界を承認しうるかどうかということ、また、ルターその人はその人生において、彼のとった方向が真理へと向かっていることを示したのだが、そういうルターがいなくなるや、彼のとった方向があまりにも容易に誤謬の道へと通じうるのではないかどうかということ、こういったことは別問題なのである」^{*26}と微妙な発言もしている。いずれにせよ、ルターを契機にキリスト教世界がその後誤った方向へ向かうことになったとの見解を示している。『自省のために、現代にすすむ』では、『ヤコブの手紙』が取り上げられ、信仰のみならず行為の必要性が強調されるが、この点は、『汝ら自ら審け!』でも一貫している。早くも 1519 年にルターは『ヤコブの手紙』を非難して「わらの書」と呼んだ、というラウリーによる注記^{*27}でも明らかなように、ルターの思想が世俗性に及ぼした影響はあまりに大きく、自分たちに都合のよいようにそれを曲解して、「啓示は模倣 (まねび) によつてのみ真

^{*23} Th. Haecker, *Tag- und Nachtbücher 1939-1945*, Haymon-Verlag (1989) [298] (298 番目に書かれた一まとまりの文章) 参照。

^{*24} *ibid.*, [76] Kommentar (76 番目に書かれた文章に関する編集者の注釈)。

^{*25} P. XII A61.

^{*26} S. Kierkegaard, *Dømmer selv!*, *Samlede Værker* Bind 17, Gyldendal (1962) 214.

^{*27} 『著作全集』第 14 巻 119 頁の註 14 参照。

「**理となる**」*²⁸ことを退けさせる口実まで世俗性に与えてしまったのである。

このように、ヘッカーは、新聞と大衆化の関係ならびにそれと政治との関係を読み取ったキェルケゴールの深い洞察と鋭い先見性を評価しており、また政治とキリスト教との間の異質性について、それが曖昧にされているがゆえに殊更強調する点、および二人が生きた時代の精神的混乱に元来ルターの思想が直接的あるいは間接的に関係しているとする点で両者は一致している。

第2章 キェルケゴールとヘッカーの相違点

ヘッカーが目指したのは、「カトリック信仰において統一されたキリスト教的ヨーロッパ」*²⁹である。1933年刊の『人間とは何か』の中では、「人間とは何かという問いが今日ほど不確かであったことは決してなかった」というマックス・シェーラー (1874–1928) の言葉が引用される。ヘッカーのかつての師シェーラーは、この著作の中で集中的な批判を浴びせられるが、その理由は、シェーラーの思想に含まれる偏狭な「ドイツ的」「ドイツ人的」といわざるをえない異端的な要素による。すなわち、「彼の人間観は空想的であるが、それだけ一層よりドイツ的で、人間において、人間を通して初めて、新たに存在する神 (ein neuer wesender Gott) は自覚に至るのであり、それどころか、初めて存在そのものに至りさえする。古い原ドイツ的異端が彼のテーゼの根底にある。われは在りて在るもの (Ich bin, der Ich bin!) と語った永遠に存在するもの (das Ewig Seiende) の代りに、『生成する神』 (der werdende Gott) 」*³⁰が考えられているとヘッカーはいう。

この著書には、ドイツ的に曲解されたものではない、人種や民族といった人間的区別のない、ヨーロッパ的キリスト教への思い、そしてヘッカーがモットーとしてこの書に散りばめた「我々は階層主義者である」 (Wir sind

*²⁸ H. ディーム 『キェルケゴールの実存弁証法』佐々木一義、大谷長訳、創言社 (1969) 233.

*²⁹ *Tag- und Nachtbücher*, [76] Kommentar.

*³⁰ Th. Haecker, *Was ist der Mensch?*, Kösel-Verlag (1959) 116.

Hierarchisten.) という言葉に託した思いが込められている。それは、「階層主義者は、哲学においても愛を通してのみ階層主義者である」^{*31}と述べられているように、愛のメッセージを伝えるものである。

階層 (Hierarchie) は神による聖なる支配の秩序を意味する。階層について木村直司は、「人間の生物学的生命を過大評価し、精神性を極度に軽視するナチズムの世界観的二者択一の要求に対し、ヘッカーが提示する哲学的原理は、中世キリスト教の段階主義の伝統にねざす階層主義である」^{*32}と述べ、彼がキェルケゴールの「あれかこれか」的思考から、ニューマンの「信仰の哲学」へと転換した内面的動機がそこに認められる、と記している。

キェルケゴールの「あれかこれか」がナチズムが迫る二者択一とは似ても似つかぬものであることはいままでもないが、ヘッカーがキェルケゴールの「あれかこれか」に見て取った何が彼をキェルケゴール的思考から離反させたのか、この点は本章のテーマとも重なる。その要因を幾つか挙げるなら、まず、ヘッカーから見て階層主義的意味での愛がキェルケゴールに欠けていることがその要因の一つであることはすでに明らかといえよう。哲学的にも愛が標榜される階層主義へとヘッカーは転じたのであるから。

「我々は階層主義者である」というモットーは「すべてを支配している原理としての愛が理解されなければ、その理解は部分的なものにとどまる」^{*33}といわれ、「愛の働きは調和としての統一である。その場合に、あたかも『支配』がまったく不要であるかのようであり、あたかも主が誰かをまったく知る必要がないかのようである。その際、三位一体の第二位格である永遠の息子が、父の右側に座しているにもかかわらず、人間の足を洗っている」と愛の強調は続く。さらにヘッカーが友人宛てに書いた最後の手紙には、「神は私を厳しい学校へ入れられた。しかし私は、神が愛である、冷酷なほど慈悲

^{*31} *ibid.*, 9.

^{*32} 木村直司「1930年代の歪められた人間像」、上智大学紀要「ドイツ語圏研究第5号」、3。
なお、ヘッカーの思想に関する深い洞察は木村直司先生による諸論文を参照されたい。

^{*33} *Tag- und Nachtbücher*, [703].

深い、という信仰を失わなかった」*³⁴と書かれていたという。

ヘッカーによる極めて大きな「愛」の強調に注目するたびに筆者は、脈絡を離れるが、次の滝沢克己の「キェルケゴールとバルト」の最後の言葉に必然的に導かれる。

そうして、キェルケゴールに対してはすでに早く、かれ〔バルト〕がまだ、「信仰かそれとも不信仰か」の二者択一 (Entweder - oder)、人間的な実存・決断に重心をかけすぎているという批判を下すことを躊躇^{ためら}わなかった。けだしそれは、バルト自身の「発見」したかの原本的事実 (のちにいう「第一義のインマヌエル」) からの要求にしたがって生じた当然の帰結であるとしても、人間の思想におけるその実現のためには、やはり、19世紀から20世紀半ばへかけての、恐るべき時の経過を必要としたのであろう*³⁵。

いかに言葉に尽くし難い厳しい時代であったか、その事実に滝沢克己は自らの体験から深く共感している。この言葉とヘッカーによる愛の強調は無関係ではないであろう。

階層主義的にいえば、あくまで「正しい秩序は自然的生命に対する精神の優位である。すなわち精神・魂・感性の順序」*³⁶である。「〔ヘッカーは〕それぞれの相対的価値を認めているだけでなく、おのおのに愛さえ抱いている」と木村直司が記しているように、ヘッカーは『人間とは何か』で、「人間は、感性 (Sinnlichkeit) とともに始まるが、決してそれなしではなく、それだけでもなく、思惟に——信仰に至る。・・・人間は感性の欠陥を放棄し、その弱さにとらわれはしないが、それを自ら見捨てはしない。それがなければ、人間はまったく存在しないだろうし、また精神として存在しない、というのは、人間は純粋な精神や天使ではなく、決してそれにもなれないか

*³⁴ *Kritik der Gegenwart*, 110.

*³⁵ 『キェルケゴールの講話・遺稿集』月報8。

*³⁶ 木村直司、前掲論文、14.

ら！」^{*37}と述べ、感性も切り捨てない。だからといって彼にとって重要なのは、決して「あれもこれも」ではなく、階層主義的秩序であり、その秩序に基づく愛である。

ギュンター・ビーマーの「テオドール・ヘッカー——ジョン・ヘンリー・ニューマンの影響を受けた重要な改宗者の一人」という論文の中に、「キェルケゴールからニューマンへ至るヘッカーの歩みの哲学的-神学的根拠」という一節がある。その中でビーマーは、ヘッカーが自らの信仰史を含め、哲学、神学そしてキリスト教信仰の「原理」(Grammar)について、「原理の主目的は、キリスト教が理に適っていること (Vernunftgemäßheit) を証明することのうちにある」^{*38}と述べる要約に基づいて、次のように結論する。すなわち、「・・・〈一方のキェルケゴールが火のような若者の道、絶対的な情熱の道を行き、いわばすべての人間的蓋然性を片づけ、できることなら空間をなお真空にして、ぎりぎりの信仰の賭けへの『飛躍』をするのに対して、ニューマンのほうは、成熟した人間の道、思慮深さの道を行き、いつも彼にできるところで、いつも彼にできるやり方ですぎ間をふさぎ、ますます蓋然性を積み重ねて、ついには確実性への質的移行が行われる地点にまで至る〉——私見によれば、ヘッカーの決定的な告白は後者に従っている。というのは、彼が、私としては後者の道を、人間的並びに神的に自然な、望まれた、ふつうの道とみなす、と告白するのに対して、前者の道は、例外的にのみ、個別的な魂にのみ、一定の目的のために神によって許される、しかしついでながら極めて危険である、というとき、彼はニューマンの信仰理由に納得しているのだから」と^{*39}。

^{*37} *Was ist der Mensch?*, 9.

^{*38} G. Biemer, *Theodor Haecker — Ein prominenter Konvertit im Bannkreis John Henry Newman*, 7 参照。(<http://www.Guenterbiemer.de/jhn/hae.htm>)

^{*39} このニューマンの道は、『わが生涯の弁』中の、「神が、・・・宗教的な探求では蓋然性の集積によって確実性に到達することを欲せられるのであるから——神はわれわれがそのように行動することを欲し、そう欲するがゆえにわれわれの行動においてわれわれに協力し、それによってわれわれにさせたいと望まれることをする力をわれわれにあたえ、われわれの意志が神の意志と協力しさえすれば、われわれの結論のもつ論理的な力より

キェルケゴールは『汝ら自ら審け!』中の「酔いから目醒めるということについて」の箇所「蓋然性」を問題にしている。「酔い」は世俗性とキリスト教の立場では全く逆に解釈され、しらふを自称する人々が蓋然性を放棄しないのに対して、次のようにいわれる。「見よ、この点でキリスト教的なものは無限に異なっている。なぜなら、キリスト教的には、いやそれどころか単に宗教的にいっても、蓋然性を決して放棄しなかった者は、断じて神に身を委ねることはなかったということが妥当するのである。宗教的な敢行はすべて、ましてやキリスト教的な敢行はすべて、蓋然性とは反対側に存するのであり、蓋然性を放棄することによって存するのである」*40。

ヘッカーがキェルケゴールから離反した更なる要因は、この蓋然性の放棄に象徴される悟性、理性の放棄である。「人間が神の像に従って創造されている、という啓示の答えについて、それは不条理 (absurd) ではない。もちろん人間の悟性にとって大きな難点をもつが、単刀直入に、それどころかまっさかさまに (kopfüber) 神秘に至る。神学は、人間たちが啓示の答えの難点を上から克服するために、再びその明かりで照らしてやらねばならない」*41といわれることで明らかのように、啓示の答えは理性を超えても、理性に反するものではないとするヘッカーには、不条理は認め難い。彼はその著作『人間とは何か』を貫いている二つの原則を提示するが、それは自らがもっている確固とした根本的な原則について説明できないことは、詩人には許されても哲学者には許されないという考えに基づく。したがって、「ある原則を思弁的 (spekulativ) に実行する」*42姿勢を哲学者として彼は重視する。

二つの原則とは、「高次のものは低次のものを説明することはできるが、低次のものは高次のものを決して説明することはできない」*43ということ、

も高度の確実性にまでわれわれを導かれるのである」(J. H. ニューマン『わが生涯の弁』川田周雄訳、現代キリスト教思想叢書 3、白水社 (1973) 158) という言葉と重ね合わせるとより明確になる。

*40 *Dømmer selv!*, 134.

*41 *Was ist der Mensch?*, 160.

*42 *ibid.*, 11.

*43 *ebenda*.

および「人間の可変性は相対的なものであり、その不変性は絶対的なものである」*44ということである。要するに、「人間が神の像に従って創造された、という命題は、まさにそれを与えた啓示によって神の受肉と救済において拡大され、補われた。創造の目標はその本性の擁護と神的承認を受けて神へ帰ることである。・・・しかし人間的方法ではなく、神的方法と神的意志に従って。・・・今からは (von nun an) もはや単に神の像であるのみならず、神自身である人を介して創造されざる本性に関与しうるが、・・・〔同時に〕人間が、下から始まった創造の内部で、あらゆる他の諸物がすでに創造された後、神の像と類似に従って、・・・弱さと有限性と腐敗しやすさにおいて創造された、という前提が永遠に存続する」*45ということをおぼれず人間としての分を弁えることが彼にとっては重要なのである。「人間とは何か」という問いに答えるには、神学を頭とした階層主義的秩序による諸学問の共同作業が必要とされる所以である*46。

したがって、ヘッカーがキェルケゴールから離反した最大の要因は、キェルケゴールによる実存重視を考慮に入れても、例外的存在としての人間の意志が前面に出すぎて、神の意志が見えにくいことであろう。ヘッカーが神的意志を強調する背景として、彼が生き抜いたきわめて非人間的な時代の影響が多分にあったと思われる。あまりに非人間的な時代だからこそ、「気高い人が絶望しないことが肝要」*47と彼は考えたのである。

第3章 ゴッティエとキェルケゴール

ナチ政府に対する白バラ抵抗運動のピラは、1942年6月、7月に、おそらく最初の4号までがゴッティエ・ショール*48の兄ハンスとその友人シュモレル

*44 *ibid.*, 12.

*45 *ibid.*, 171 参照。

*46 *ibid.*, 164 参照。

*47 *Der Begriff des Auserwählten*, 412.

*48 ゴッティエ・ショールはドイツのシュヴァーベン出身で1921年にプロテスタントの家庭に生まれ、42年5月にミュンヘン大学に入学する。白バラ抵抗運動に加わり、43年2月22

によって書かれ、不特定の宛先へ郵送された。それらのうち、あとのほうのピラには、ゾフィーもある程度関与していたと思われる。さらに1943年1月に5号が、そして2月には6号がフーバー教授の関与のもとで作られ、郵送されたが、ハンスとゾフィーは2月18日の「白昼、何の偽装もせず、予防策もたてずに、投函しなかったパンフレットを大学の本館」^{*49}のあちこちに置き、そのうちまき散らされたピラが用務員の目に止まり、逮捕された。

ゾフィーがミュンヘン大学で学び始めるのは1942年5月になってからで、ヘッカーは時折自著や内密に書き溜めていた『日そして夜の記』（死後出版）の一部を彼女たちを前に朗読して聞かせた。この白バラグループの若者たちが、「ムート、ヘッカーと、中世の教会秩序、国家秩序への賛嘆を同じくしないながら、この二人から強い影響を受け、それが彼らの自己発見のいとぐちとなったことはたしか」^{*50}といわれている。また、この二人が、「人を拘束しない、解放された自由なキリスト教への道をつけてくれました。……このように言われていました。『これ以上理性で考えられなくなったら神を信じてよい。理性で、もうカバードキなくったところに初めて信仰の存在が許される』と」^{*51}とインゲが述べ、「私が何かわかるというときには、まずあらかじめその何かは私の中で育たなくちゃならないの」^{*52}とゾフィーが語っているのは、先に言及したニューマンが説いた道と解されよう。白バラのピラ1号、3号でくり返される「消極的抵抗」の訴えもヘッカーの影響が大きいと考えられる。

ゾフィーとキェルケゴールについては、両者間に次のような一種の併行現象ともいえる事態が見られるように思われる^{*53}。

日にわずか21歳で兄ハンスとともに処刑された。

*49 C. ベトリ『白バラ抵抗運動の記録』関楠生訳、未来社（2006）189。

*50 『白バラ』、66。ムートはカトリックの月刊誌「高き地」を主宰。

*51 H. フィンケ『ゾフィー21歳』若林ひとみ訳、草風館（2006）109。

*52 I. イェンス編『白バラの声』山下公子訳、新曜社（2006）265。

*53 併行現象とみなす理由は、彼女がキェルケゴールの思想にどの程度触れえたかが不明であり、さらにあまりに短命であるので、断定的なことをいうことはできないが、生き方の根幹において両者が幾つかの共通項をもっていると考えられるからである。いうまでも

(1) 父親との関係：周知の通り父ミカエルがキェルケゴールに及ぼした宗教的、精神的影響は限りないものであり、彼の人生は究極的にその方向性から外れるものではなかった。ゾフィーの父は、「第一次大戦中は、戦争の熱狂の渦に巻き込まれなかった数少ない平和主義者のひとり」*54であった。町長経験者でもある彼の基本的な姿勢は「自由、進歩的、革新的」であり、ヒトラー・ユーゲントに熱を上げている子供たちには、「あいつ〔ヒトラー〕は軍需工業に手をつけ、兵舎を建てる。・・・生活がいくら物質的に保証されていたってだめなのだ。われわれは、表現の自由、信仰の自由、政治的にも自由な意見を述べる権利を持つ人間なのだ。こういったことに干渉する政府は、信頼するに値しない」*55 といっている。父がよく口にしていたゲーテの一句「すべての権力に立ち向かうべし！」については、「ゾフィーの場合これは、自分自身に対する厳しさと、まわりの心地良さを捨て、良心の選択に従うということの意味していた」*56。ゾフィーに対する父の教育は、人間としての精神的自由の尊重、人間の尊厳を蹂躪するものへの拒否について教えるものであり、彼女は終生その方向性から外れなかった。また、ゾフィーは、キェルケゴール同様兄弟姉妹の中で父の影響を最も強く受けていたといえる。

(2) 表現方法：ゾフィーは 1941 年 10 月から翌年 3 月までブルームベルクの幼稚園で働く。その間にゾフィーが書いた日記と書簡に関するインゲ・イエンス（『白バラの声』の編集者）による次の解説は示唆的である。

この日記は魂の遍歴記録といってよい。その中心には宗教的瞑想がある。・・・ここでは日記を別に一つにまとめることをせず、書簡と混在する形で、日付順に並べた。ゾフィー・ショルが、具体的、現実的な話題をもち、受け取り人という相手のある書簡をその相手および自

なく両者の生きた時代、環境が大きく違っているので方向性が異なる場合もあるが、事態そのものを問題にした。

*54 『ゾフィー 21 歳』、13.

*55 同書、42.

*56 同書、91.

己との対話によって、別の、より形而上的次元で補完しえていたことがはっきりわかっていただけであろう。他者との対話、自己自身との対話、外に向けて語られたことばと秘められた反省の記録、書簡と魂の省察とは切り離しえない^{*57}。

ゾフィーの場合には、ブルームベルクで帝国勤労奉仕に携わったほんの数か月間の記録にすぎないが、彼女の、この書簡と日記という二本立ての相互補完的な表現方法は、キェルケゴールのような深い意図に基づくものではないにせよ、彼による、仮名の著作と宗教的著作とを並置させる著作の方法を連想させる。

(3) 政治：『白バラを生きる』の著者も、白バラ抵抗運動が「非政治的で純粹に道徳的な抵抗というイメージ、これが疑問に付されぬまま広く流布し続けているのである」^{*58}と述べ、ヴァイツゼッカーと同じ疑問を呈している。白バラ抵抗運動をめぐる、「政治的」か「非政治的」かに関する論議は多々見受けられるが、そこに価値評価が要求されると、本考察に発言する力はない。

ゾフィーは、「問題はひたすら政治ってことになっちゃうでしょう。そしてその政治が混乱してひどいものである限り、自分だけ知らん顔しているっていうのは卑怯じゃないの」^{*59}と手紙に書いている。前述したようにキェルケゴールも、「近時、あらゆる事が政治である」と述べ、ゾフィーも「ひたすら政治」という。この極端な表現は、キェルケゴールにとってもゾフィーにとっても圧倒的な政治的権力によって真に宗教的なもの、精神的なものが踏みにじられていることを表している。両者はその事実気づいていると同

^{*57} 『白バラの声』、216. 彼女が神を求めている叫びの一例（1941年11月10日の日記）：「あまりにもたびたび失敗を繰り返し、ひどく気落ちしてしまっていたとき、私はもう神に祈ることさえできないように思いこんでいた。あのとき私は、自分もはや、神に望むことなど何もないと思いこもうとしていたのだ。それは、私が再び神の前から動かないでいようと思えるようになるまで続いた。でも、あれは結局のところ、実をいえば神に近づきたいという意志だったのだ。少なくとも神に願うことはつねに許されている。それだけはわかった」（同書、220）。

^{*58} M.C. シュナイダー・W. ズース 『白バラを生きる』 浅見昇吾訳、未知谷（1995）12.

^{*59} 『白バラの声』、153.

時に、その事実から目を逸らすよう巧妙に操られた大衆がこの事態に深く関わっていることにも気づいている。少なくともこの意味での「政治的」判断をゾフィーが下していたことは認めうるであろう。

(4) 大衆との関係：キェルケゴールはコルサー事件を通して大衆の虚偽を苦々しく体験した。他方、ゾフィーも大衆の虚偽を嗅ぎ取り、自らが大衆に埋没することを常に警戒している。「本当に大事なものは、私たち自身がもちこたえられるかどうかでことなのよ。自分の得になるかどうかしかかまわない大衆の波のなかで、自分を失わないでいられるかどうか」*60と。

(5) 『ヤコブの手紙』：すでに第1章で述べたように、キェルケゴールは『自省のために、現代にすすむ』で『ヤコブの手紙』を取り上げ、『汝ら自ら審け！』でも引き続き、行為の重要性が説かれている。この『ヤコブの手紙』については、「あの子〔ゾフィー〕は『ヤコブの手紙』にあるように『御言を行う人になりなさい。ただ聞くだけの者となってはいけない』を座右の銘としていました」*61とインゲは語っている。「ゾフィーにとって宗教とは、自分の存在の意義、歴史の意味と目的を探究すること」*62であった。

(6) 敢行：キェルケゴールも、「酔いから目醒めること」を問題にしたが、ゾフィーにも次のような発言がある。「醒めるかどうかは個人の問題だと思うわ。そして、醒めるのが難しい状況に追いこまれてはじめて、本当に覚醒するってことになるんじゃないかしら。・・・でも運命は、この点でも私たちにとてもすばらしい機会を与えてくれてるんだわ。たぶんこうして機会を与えられたことを過小評価してはいけないのよ」*63と。この自らが置かれている苛酷な運命を前向きにとらえる強靱な精神もキェルケゴールに似ている。

また彼女には強い負い目の意識がある。「〈今ユダヤ人が受けている苦しみは、キリスト者が担うべきであろう〉という再三の訴えによって、ヘッカー

*60 同書、157.

*61 『ゾフィー 21 歳』、109.

*62 同書、93.

*63 『白バラの声』、158.

は〈白バラ〉グループに大きな影響を与えた」*64とインゲは記している。ゾフィー自身、「私よくみじめな気持ちになるのよ。すべての苦しみが私のなかを通っていってくれないから。少なくとも、ゆえもなく私より苦しむことを余儀なくされている人から、自分の分の苦しみは取りのけてあげられるはずなのに」*65と述べている。ゾフィーがガイヤーにはっきりと「この政府のために多くの人が命を落としているわ。今こそ、誰かが命を賭して何かしなくちゃいけない」*66と語ったのは、行動の2日前のことであった。獄中では、「私たちの行動で何千もの人が心ゆすぶられ、目をさますのだったら、私の死など何でしょう？」と述べている。キェルケゴールの場合には、「普通一般的に教え込まれているキリスト教は人間の弱さに応じて寛大に調節されたものに過ぎないという事を、教会は大監督の口を通じて認めるべきだ」*67という要求は、結局はミュンスター監督の死後に持ち越され、しかもマーテンセン新監督によってさらに寛大さが倍加されたものになり、ついに彼は行動に出て倒れた。ゾフィーもキェルケゴールも自らの責めを自覚し、真に宗教的なもの、精神的なものを封じ込めようとする権力に対して命を賭した行動に出たのである。これは殉教ではないか。ラウリー著『キェルケゴール小傳』にはキェルケゴールの最後の言葉として『『犠牲者』、懲治剤』が挙げられているが、その中の次の言葉はまさに両者にあてはまる。

人間としての立場から言えば、かく犠牲にされて、少量の肉桂になるというのは、何という苦痛だろうか！けれども他面、神は、かくの如くして利用せんがために誰を選ぶべきかを充分よく知って居給うのであり、そして更に神は、心から同情して、その者が犠牲とされる事を転じて、その者にとって大いなる祝福となし得給う*68。

*64 『白バラ』、65.

*65 『白バラの声』、263.

*66 『ゾフィー 21 歳』、165.

*67 W. ラウリー『キェルケゴール小傳』大谷長訳、創文社(1958) 229.

*68 同書、271.

おわりに

最初に課題として提出したキェルケゴール、ヘッカー、ゾフィーの三者の関係について、一面的な見解であるが、次のように考えたい。まずキェルケゴールとヘッカーの関係は、非連続的連続といえるであろう。ヘッカーはキェルケゴールの思想に共鳴し、その思想を評価しつつ歩み始めた。その後改宗するほどの大きな影響をニューマンから受けたにもかかわらず、異議を唱えながらもヘッカーは最後までキェルケゴールと付き合い続けたからである。他方ヘッカーとゾフィーとの関係は師弟関係として連続的である。それに対して、キェルケゴールとゾフィーとの関係は、上記のような一種の併行現象的諸側面が見られることから、非連続の連続といってもよいかもしれない。いやむしろ、ヘッカーがキェルケゴールからニューマンへ移行した一因といわれる「あれかこれか」をゾフィーはキェルケゴールと共有したともいえる。それはゾフィーの若さかもしれないが、やはり父から受けた教育、彼女自身の資質が大きいのであろう。「何かしなければ」という緊急性は、白バラの中でゾフィーに最も強く意識されていたと思える。同じ時代を生きたヘッカーとゾフィー、その前者がキェルケゴールを批判して階層主義的愛を強調し、消極的抵抗を訴えたのに対し、後者がキェルケゴール的敢行へと動かされたのも、ある意味ではやはり時代のなせるところであった。

ヴァイツゼッカーの演説にある「心にまとう無関心のマントを破り捨てよ」というピラ（5号）からの引用文は、本考察にひきつけていえば、キェルケゴール的にも、ゾフィー的にも、大衆的あり方から目醒めよという警告であった。「精神的自由の侵害こそナチスを嫌悪した『主要な理由』」*69とゾフィーはいう。重要なのは、敢行の結果ではなく、ナチ政権の圧政の実態から眼を逸らさず、ノーをつきつけ、あるべき姿へ向けて勇気ある一歩を踏み出したことである。

キェルケゴールが体験し、その本質を鋭く分析した大衆化はさらに深刻さ

*69 『白バラを生きる』、122.

を増し、現代のネットに象徴されるマスメディアは脅威的である。彼らの時代とは比べものにならないほど広範囲にしかも短時間で無人格的な情報は子供まで巻き込み駆け巡る。私たちは、ゾフィーたちが送った合図のエコーを心の中に感じ続け、自らがどのような時代に生きているかを見定めて、知らぬ間に精神的自由を奪われ、人間的尊厳を見失うことがないように用心したいものである。

(本稿は、2008年6月22日のキェルケゴール協会の年度例会において発表した原稿を加筆訂正したものである。)

(やまもと くにこ)